

読譜にどう向き合うか

——楽譜の必然性と音楽学習

森下 修次 (新潟大学)

1 はじめに

音楽教育に携わる者は、ほとんどの場合読譜ができて当然である。ただし、そこで求められる対象は西洋音楽に使用される「五線譜」に限定される。我が国で西洋音楽が普及するのは明治時代以降で、五線譜が普及するのも西洋音楽の普及に伴ったものと思われる。しかしながら、我が国においても五線譜普及以前から楽譜は存在したし使われている。平野(1982, pp. 550-552)によると、日本の黎明期に大陸からいろいろな楽曲が導入されるのに伴って楽譜も伝来し、楽曲の整理や発展に伴ってさまざまな記譜法が発展したと述べられている。にもかかわらず、我々が楽譜や読譜を考へるとき西洋音楽で使用される楽譜のみ念頭においている。例えば『楽譜の歴史』¹⁾という書籍は楽譜の歴史について詳しくかつわかりやすく書かれているが、日本をはじめ世界の音楽の楽譜については触れられていない。

しかしながら、西洋音楽においても通常形態の楽譜以外にポピュラー音楽でよく使用されるタブ譜などがあり、グレゴリオ聖歌などでは通常の五線の楽譜とは異なる楽譜が使用される²⁾。こういう独自の書式を伴う楽譜は我が国の雅楽、仏教音楽をはじめ様々な音楽で使用されているが、これらは五線譜も含め歌唱演奏の必然性から生じたものだといえる。

そのことは使用する楽譜には伝えようとする情報と使用目的があり、必要性和目的に応じて異なった形状になっていると考えるべきである。すなわち、楽譜を教育することにおいてそれらを使用する重要な意図・必然性を理解した上で使用すべきものと考えられる。

他方、世界中の音楽、特に民族音楽と言われている音楽では楽譜がないものが多い。そういった曲は仮に五線を使って表現しようとしても、記譜が困難あるいは不可能な曲も多い。多くは演者から演者へ楽譜などの媒体を経ずに伝承されている。小泉(1980, pp. 36-52)は『おたまじゃくし無用論』という著書の中で、「学校ではおたまじゃくし教育は有害である」とまで言っているが、確かに学校現場で民族音楽や日本音楽において原曲の演奏にあらず楽譜のみで教えると原曲と似ても似つかない音楽を教えてしまいかねない。例えば教科書に掲載されている「こきりこぶし」³⁾においては、掲載写真はこきりこ保存会の人たちによるもので「本物」であるが掲載楽譜は採譜したものか編曲楽譜である。大石(2007)は、この教材を使って小学校の音楽の授業で、子ともたちに編曲楽譜をみて演奏させた場合と保存会演奏⁴⁾を聴き取らせて表現させた場合を比べた。前者は楽譜通りの演奏でリズムも等拍であったが、後者は微妙なリズムのゆれも見事に表現していた。いうまでもなく「こきりこ」の良さを表現しているのは後者であった。本来のオリジ

ナル曲のもつ力を味わうという意味では、補助教材の使用を伴わず教科書のみで教えるのは危険である。やはり楽譜の目的と意図をしっかりと持たなければいけないということだ。

2 楽譜を使用する必然性

では、我々が楽譜を使用する必然性は何であろうか。

西洋音楽では楽譜を見て、記号の固まりから音楽を再構築する作業が求められる。例えばピアノレッスンでは多くはピアノの演奏と同時に楽譜の読み方も教わる。しかし、ここで考えなければならないことは、楽譜が読めるようになれば必ずピアノが上達するとは限らないことである。ピアノを美しく弾くには指使いなどの技術面、音量バランス、音色、様式観など多くのことを学ばなければならない。しかしそんな細かいことは楽譜にはいちいち示されていない。結局、教師の指導、CD、演奏会などの鑑賞、教師の模倣を通じて楽譜に書かれていない情報も学ばなければならない。すなわち、楽譜に音楽の全ての情報が書かれていないために、読譜以外の方法で情報を補って学習しなければピアノ教育は成立しない。また、中学校の合唱などではしばしば見られるが、生徒は、歌詞は参照しても音符はあまり見ない。音符が読めなくとも何とか理解しようとする生徒は楽譜に音名、階名を楽譜に書き込むことがあるが、それでも最終的にはCDや他の人が歌っていることの模倣に徹しているように思われる。すなわち読譜以外の方法で情報を得ようとしていることに他ならない。

読譜以外で音楽の情報を得ようとすることはクラシック以外の歌唱演奏にむしろ多く見られる。歌謡曲における歌手は作曲家から届

けられた新曲のデモテープと歌詞カードで初めての曲をさらう。かの美空ひばりもそのようにして新曲をマスターしていた（新井2009, p.137）。楽器演奏でも同様な事例がある。例えばロックバンドでは基本は「耳コピー」と言われているし、伝統的な邦楽においても師範の演奏歌唱を生徒が模倣することが原則である。教育においても日本の伝統的な音楽を教えるときには五線譜は用いずに図形等の使用など工夫が必要と主張している文献もある（西岡・伊野2008, p.53）。ビートルズを題材にしたドキュメントビデオ⁵⁾を見る限り、通常の録音風景でビートルズが楽譜をみることはない。このように音楽活動で楽譜を用いない例はむしろ普通で、楽譜を用いる方が特殊なのかもしれない。

それでは、これら音楽演奏などで楽譜の必然性はないと言い切れるのだろうか。例えば歌謡曲においても編曲担当者は作曲家からもらったテープから楽譜上に旋律起こしをし、さらに各パートを構築していかねばならない。そのためには和声や対位法や様々な知識、編曲技術を駆使して一つの楽曲に完成させなければならない。現在ではDTMもあるため、全ての編曲演奏をコンピュータ内部で完結させるならば楽譜抜き作業は可能かもしれないし、演奏者を用いる場合でも小編成ならばデモテープを聴いてそれをプレーヤーが即興的に演奏してもらうことも可能であろう。しかし、編曲から音出しまでの時間と手間を考えると、生楽器の合奏においては楽譜を用いないのは非効率的であるといえる。先ほどのビートルズの例でもグループの晩年の作品はかなり複雑な構造をもっていることが知られているが、ドキュメントビデオで登場する録音シーンでも、オーケストラパートでは楽譜を用いて演奏していたことから、ビートルズの作品でも大編成の曲ではやはり楽譜が用い

られていたと思われる。これはビートルズ担当プロデューサーのジョージ・マーティンはクラシック畑の出身でありビートルズの音楽作りに深く関わっていたことと関係があるかもしれない。これらのことから編曲において規模が大きくなる、あるいは高度になるほど楽譜の必要性が高いといえる。

さらに楽譜の便利なところは作曲・編曲における推敲にみられる。ベートーヴェンは作曲の過程で推敲を重ねたことが知られているが(バーンスタイン 1966, pp.67-88)、例えば交響曲第5番の1楽章などは何度も書き直した後があり、バーンスタインが写譜屋さんに同情するというぐらいであった。このことは即興演奏の天才であったベートーヴェンでも何度も作品を書き直して作り直す作業を経て、後世に名を残す作品を書くことが出来たわけで、ベートーヴェンにとって音を視覚可して作品を構築する道具として楽譜が必要不可欠だったといえる。

3 音楽科の授業に不足するもの

文部科学省中央教育審議会の答申(文部科学省 2007)でも指摘されているように小学校や中学校の音楽の授業は全般的に歌唱偏重と言われているが、歌唱のみで授業を構成するならば、楽譜はあまり必要とされないし読譜のスキルもつきにくいかもしれない。前述の通り楽譜の書かれている情報量は限られているし、むしろ模範となる演奏を聴き取ったり模倣する形の学習の方が、はるかに実り多い授業が期待できるからである。

答申では、音楽の授業は「歌唱」「器楽」「創作(音楽づくり)」の三分野を行うべきだと述べられている。特に創作(音楽づくり)が柱の一つとして明示されたのは次期指導要領の特徴の一つである。教育現場ではそれなり

の対応を取り始めているように思われる。しかし、それがそうすんなりとうまく事が運ぶようには私には思えない。

考えてみれば我々の行っている音楽教育においてカリキュラムは元より根本となる教育思想に揺らぎがあるように思えてならない。その結果、小学校1年次には何を習得して2年次は何を…というふうにしつかりと系統立っているようになっていない。小中連携も全般的にうまくいっているようには思われえない。例えば、国語科や算数・数学科など小学校1年次2年次とそれぞれの段階に応じて習得する内容が細かく定められているし、そのための手立てもいろいろ研究が進んでいるように思われる。また、最終的に中学3年次にどのような力をつけたいのか明確である。音楽科では志向や趣味など個人の資質をどうあつかうか定かでない部分も多く、はっきりこうあるべきだという方向性の共通理解ができていない。音楽教育の意義を説明するために、例えば合唱などの集団活動でコミュニケーションや人間関係の役に立つ、情操教育云々の話がある。確かにこれらは音楽の二次効果としてはすばらしいと思うが、音楽の学習とは何か、という本質論には答えていない。現場の優れた教員は強弱や音楽の諸要素を積み重ねて表現できるよう努力しているが、発達段階毎の教育内容の積み上げが乏しいことから、結局、中学校でも基礎的な部分からやり直さなければ授業そのものが成立しないというジレンマに立たされてしまうことも多い。今回の読譜についての議論も実はこの点と深く関係するように思われる。

4 音楽の構造学習

こう考えたとき、いままで行ってきた音楽学習においては体系的な学習が不足している

のではないかと考えられる。一般的な授業は恐らく教科書を丁寧に教えていくことであろう。しかも、それすらまともにできずにカラオケでお茶を濁す授業もあると聞いている。今の教科書を見る限りどれだけ体系的に教材が構築されているかはなほは疑問を持たざるを得ない。音楽科の教科はこうあるべきだという主張より、いろいろな要素を中途半端に網羅した内容になっているように思われる。ここは、国語科や算数・数学科の様に中学3年次に生徒がどのような力をつけたいのか、そのためにはどのような授業を行っていくべきなのか考えなくてはいけないだろう。そのための答えの一つが構造学習にあるのではないかと考えている。

音楽の構造学習は簡単に一言で言えば作曲であるが、構造学習は単に旋律や曲を作ればよいのではなく、曲の体系的理解を目指すべきものとして定義している。例えば小学校1年次ではリズム創作を行うのだが、四分音符、四分休符、八分音符の組み合わせにより、それなりに変化に富んだリズム創作と表現できる。リズムを重視する点はおたまじゃくし無用論と似ているが、異なるのはリズム創作のために積極的に楽譜を活用しようと考えていることである。これは音楽の構造学習のためには何らかの視覚化が必要と考えられるため、そのために楽譜を利用するのが便利だと思われるからである。こういったことを私に教えてくれたのは、新潟大学で毎年行っている新潟市教職12年経験者研修での授業であった(森下・中村・大工原・斎藤2008)。

そこである先生の授業の授業を見せてもらった。♪♩の音符カードを組み合わせてリズム創作をおこなう授業であった。児童らはとても熱心に学習した。カードを並べ替えていろいろな作品を創るのだが最初は適当に並べて演奏が困難な「曲」も自身で演奏する

うちに演奏可能な音楽的にも整ったものに変化していく様子はたいへん興味深かった。何より自分の作品に愛着があり、音符カードが仮留めされた作品(本当はカードをバラして再利用するつもりだった)を大事そうに家に持って帰ると言い出した児童が多くいたことである。この事実から楽譜は必要性があつて初めて覚えられる、すなわち覚えられないのは楽譜を理解する必要性が無いから覚えられないだけであることを悟らされることとなったと同時に、構造学習では楽譜が有効な道具である点もわかった。

さらにこの授業の事例のように音楽の構造を学習することが、音楽学習の基本になるのではないかと考えるようになった。

この授業では自己の作品の試奏と他人の作品の試奏・聴取が含まれていたが、これらの作業は器楽や歌唱などの表現・鑑賞にもつながると考えられる。このように創作と歌唱・器楽がつながることがカリキュラムの構造化・体系化にもつながると考えられる。つまり、今学習している内容が次の教材のどの部分にどう繋がっていくのかが明示できることである。

今までの学習は音楽を聴いて何かに気づかせるというものが多く見られた。しかし、いきなり知らない曲を聴かせて何かに気付け! というのではなく、構造学習で学んだ題材、例えば♪♩のリズムを用いたリズムパターンあるいは簡単な旋律を伴った作品を作った後で、同様なリズムを駆使した作品を鑑賞することにより鑑賞曲の特徴をより理解し、さらに同様なリズムを重要な部分に用いた器楽・歌唱作品を表現して応用するというストーリーが考えられる。学習した要素を創作、鑑賞、表現でリンクさせて学習するというものである。おそらく今まで鑑賞がうまくいかない、難しいというのは、賢明な音楽教育者

にとっては当然のことと思われる関係性の把握、すなわち構造的観点が周知徹底していないことが原因の一つと考えられる。こうすれば音楽を聴いて意味のない絵を描かせるといった不毛の授業は無くなるだろう。ちなみにバーンスタイン⁶⁾は「音楽は音楽でしか表現できないから音楽である」と述べている。そのため音楽から何かを感じることは重視していたが、音楽を聴いて何か物語や風景を思い浮かべる無意味さを説きながら、音楽作品のどの部分がすばらしいのか音楽構造に着目し解説を行っていた。音楽の授業はそういった音楽構造を学習できる授業を目指すべきだし、音楽構造を視覚化して示すための道具として楽譜が必要になるのではないかと考えている。

ところで、先ほどピアノ演奏と楽譜の関係に教育的に否定的な意見を述べた。しかし、私の知っている範囲ではピアノを学習した人はほとんどの人において読譜スキルを持っている。これはジャズピアニストなど本番では楽譜を用いないで即興的に演奏するプレイヤーも同じである。そればかりか有名なジャズピアニストは、モーツァルトのピアノ協奏曲など難易度の高いクラシックの楽曲を弾ける人も多い。これはピアノを弾くという行為が既に構造学習を伴っていると考えると納得しやすい。ピアノ演奏では単旋律で済むことはまれで、意識していなくても旋律と伴奏部分、複旋律、和声の変化、指使いなど様々なことを理解していかなければ演奏はできない。すなわち、ピアノ演奏の学習では楽譜の理解が必要となる要素が多いため読譜できるようになると考えられる。

5 構造学習の実例

さて、中学3年次につけたい学びの力と

はなんだろうか。構造学習と読譜が必要になる例として、2002年新潟大学附属長岡中学校で行われた現代音楽を題材とした公開授業を紹介する。現代に生きる我々にとって現代音楽は最も身近でなければならない音楽である。しかしなかなか現実はそうではない。現代音楽の意味を理解すること・鑑賞できる能力を育てることは容易ではないが、それらの能力をつけることは社会的にみても意義のあることであり、様々な応用が期待できるということでこの授業を行うこととなった。なお、この授業は私の他に作曲専門の清水研作助教授と当時の大学院生が授業者の三浦勲教諭と共同で授業の下準備を行ったものであった(森下・三浦・清水 2003)。

この授業では現代音楽の背景から迫り最終的にシェーンベルクが提唱したとされる十二音技法を用いた創作授業で完結することとした。十二音技法の音楽は一般的に無調の音楽とされ、この作風に馴染みのない人からは避けられているように思われているが、聴き慣れると一般的な調性音楽と同様、美しい音楽である。また、技法的にも困難と思われがちであるが、導入の部分に限定すればそうでもなく、初心者でもある程度の音楽が作れてしまう面白さと新鮮さがある。

まず十二音技法の最初の作業は12音から音列を作成することからはじまる。この12音列には同じ音は二回使用することが出来ない。C, C#, D, D#, E, F, F#, G, G#, A, G#, Bの12音全てを使い切る形となる。この12音を全て使用するという条件を満たせば音順はランダムでも意図的な旋律でもよく、これから作る音楽作品の「主題」になるため音楽の印象を決める重要な要素となる。そしてさらにそれからマトリクスを作成する。マトリクスは「順行」「逆行」「反行」「順行反行」の4つの方向性から成り、これら



アクト2「音楽とは何か」 シーン8「表現の可能性」
《君も私も名（達）作曲家！》・学習プリント

- 年 組 氏名
1. 創作音楽には2人組を作って取り合いたいと思います。まずはペアを作りましょう。ペアの氏名
 2. それでは早速、12音階法を用いた音列をいくつか作ってみましょう！表記方法は音名・五線譜、どちらを用いてもかまいません。また、それぞれの音列から受けるイメージ・情景を記入してください。

音列A

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

イメージ・情景

音列B

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

イメージ・情景
天行 天行

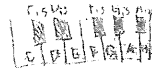
図1 生徒の作成した音列

によって生成された音列を使用することにより、変化に富んだ作品を創ることが出来る。

図1は実際に生徒が作成した音列例である。楽譜を使用して12音から成る音列を作成している。この授業を受けた生徒のスキルを考慮して音名、五線譜のどちらを用いてもよいことにしてあるが、図1の例のように1オクターブの範囲を超えての音列も可能で、音高が直接視覚的に確認できる五線譜を用いて作成するのが有利である。なお、音列Bの例ではC#が二度使われているが、これは原則避けるべきである。

図2の例は別の生徒のマトリクスである。そのため図1の音列と図2のマトリクスは直接対応していないが、図2のマトリクスを作成した生徒も図1の音列と同様な音列を作成してマトリクスを作成している。

図1の音列作成はいわばフーガにおける



アクト2「音楽とは何か」 シーン8「表現の可能性」
《君も私も名（達）作曲家！》・学習プリント

「マトリクス」を使って、様々な「音列」作り挑戦！

- 年 組 氏名
- ペア 氏名
- *説明を聞きながら、次のマトリクスを完成させましょう！
(空に入った音列が見つかるかな?)

順行 (Prime) ← → 逆行 (Retrograde)

音階	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	0	F	b	b	4	10	11	A	8	1	2	3
2	0	F	C	H	A	b	A	D	C	F	G	G
3	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
4	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
5	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
6	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
7	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
8	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
9	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
10	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
11	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G
12	0	b	A	C	H	A	b	A	D	C	F	G

(Retrograde Inversion)
*完成したマトリクスの中から、是非創作に取り入れたい音列を記入しよう！

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	イメージなど

図2 生徒の作成したマトリクス

主題作成のようなもので後々作品に大きく影響する極めて重要な作業である。さらにそれらを元にして図2のマトリクスを作成する。このマトリクスはいわば主題に対する副旋律や対旋律のようなもので、これらのマトリクスの旋律を絡ませることで、より複雑で美しい作品を作ることできる。実際に生徒たちはピアノやキーボードで音を確認め、マトリクスから音を拾いリズムを伴わせて作曲を進めた(図3)。作曲作品は楽譜に写し取り、再演して完了となるのだが、この授業ではここでの作業が公開授業で単元の最終として設定されていたため、生徒の作品例を示すことはできなかった。しかし、授業ではまさしく現代音楽の「あの響き」が見事に再現されていたし、生徒たちにとってもこの作曲経験は有意義だった様子が当日の授業でうかがえた。この授業の問題点はやはり読譜のスキルが不



図3 生徒がマトリクスをもとに作曲しているところ

十分な生徒がいたために、せつかくの作曲作業が十分できなかつたことであつた。すなわち、マトリクスを使ってせつかく面白い音楽が出てきているのに、それを楽譜に写し取って記録する作業やリズムを添加させる作業が思い通りできないために、せつかくの学習が十分最後まで到達できなかった印象があつた。当日の授業の様子から学習内容の方向性は決してまちがっていなかったし、中学生用の教材として学習水準も決して高すぎることはないと確信したが、それまでの学習の積み上げ、特にリズムと読譜の学習が不足しているように思われた。その点がやはり残念であつた。

なお、この授業については後日談があつた。この研究に協力してくれた大学院生が大学院修了後高校に勤務して、このとき開発した授業案に基づいて音楽の授業を行ったところ、生徒から大変好評だつたそう。その高校はいわゆる進学校ではなかつたが、授業をすすめるうちに、現代音楽の学習を、好感をもって受け入れられるようになったそうである。この授業では、本当はやらなくてはいけないことをやってないことに気付かせてくれたように思われた。

6 おわりに

本質的に言えば音楽に楽譜や読譜は不必要である。今までの学校の音楽の授業では楽譜が本当に必要とされる授業をあまりしてこなかつた。しかし音楽の構造学習を行うならば音の視覚化が必要で、そのための楽譜の使用は妥当性がある。今後は楽譜をさまざまな道具の一つとしてどういった意味を持つのか慎重に考えながら教育現場で使用する必要があるだろう。

[注]

- 1) 皆川達夫 (1985) 『楽譜の歴史』音楽之友社
- 2) 例えばテ・ラローシュ (1990) (岳野慶作訳) 『ソレム楽派によるグレゴリオ聖歌の歌い方』音楽之友社などに歌い方が記されている。
- 3) 『小学校の音楽4』(2003)「富山県民謡(市川都志春編曲)こぎりこぼし」教育芸術社, pp.16-17.
- 4) 五箇山の民謡 こぎりこ唄 (演奏:こぎりこ唄保存会) VZCG-299 ビクター伝統文化振興財団 (2002)
- 5) モンゴメリー (監督)「コンプリート・ビートルズ」FY071-25MG パイオニア (MGM/UA・1983)
- 6) “What Does Music Mean?”, Leonard Bernstein’s Young People’s Concerts (1958), D1503, Kultur.

[引用・参考文献]

- 新井恵美子 (2009) 『美空ひばり神がくれた三曲』北辰堂出版。
- 大石容子 (2007) 「児童における日本音楽と西洋音楽のリズム表現の違い」平成 18 年度新潟大学教育人間科学部卒業論文。
- 小泉文夫 (1980) 『おたまじゃくし無用論』青土社。
- 西園芳信・伊野義博 (2008) 『中学校教育課程講座 音楽』ぎょうせい。
- バーンスタイン (1966) (吉田秀和訳) 『音楽のよろこび』音楽之友社。
- 平野健次 (1982) 「日本音楽の楽譜」『音楽大事典』2

平凡社, pp. 550-552.

森下修次・三浦勲・清水研作 (2003) 「12 音技法を用いた中学校音楽における創作授業の実践」『新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要：教育実践総合研究』 pp.105-116.

森下修次・仲村香・大工原さやか・斎藤綾子 (2008) 「小・中学校における音楽創作教育の一試案」 日本音楽教

育学会第 39 回プログラム, p.63.

文部科学省 (2007) 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)』 文部科学省ホームページ, pp. 94-97.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf